■研究委員会企画論文

若者下位文化と社会的排除

田中研之輔¹⁾

抄 録

若者下位文化研究の到達点であるポストサブカルチャーズ論は、“構造的に埋め込まれた不平等”という社会的コンテクストを看過している。この点を補う視角として注目されているのが、社会的排除論である。本稿では、以下の三点に留意して若者下位文化研究に社会的排除論の視角を導入していく。

第一に、社会的に不安定な境遇にあるとする若者を「新たな貧困層」として捉えるのではなく、「新たな社会層」として対象化すること。第二に、新たな貧困が社会的排除を生み出すという政策学的解釈図式から、新たな貧困と社会的排除がいかに相互に結びつきあっているのかを解き明かす社会学的関係図式へと認識論的に転回させること。第三に、プロセスとしての社会的排除が、たんに、グローバルな構造的要因によって暴力的に生み出されるものだけでなく、ローカルな文脈のなかで、日々の営みをつうじて、生み出され、再生産される日常的な排除であると捉え直すこと。

具体的に本稿では、2001年以降、筆者が継続してきた土浦駅西口広場を利用する若年下位文化集団のフィールドワークのデータから、三人の若者の個人史的経路をとりあげる。三人に共通するのは、学校文化の対抗的で反抗的な担い手となるわけでもなく、地元の下請け工場に従順に組み込まれていくことも拒んできたことである。彼らは、ただただ、その状況に打ち負かされているわけでもなく、文化的生活に没入することで現実から逃避しているわけでもない。担い手たちは、それまで獲得してきた下位文化的身体資本をそれぞれにいかしながら、現状を打開しつつある。

つまり、この国の社会的排除とは、若者の文化的行為を中軸とした日常生活に埋め込まれている、いわば、間隙を幾重にもかかえる脆い構造として存立し始めているにすぎない。本稿の意義は、ポストサブカルチャーズ論の文化論的分析と社会的排除論の視角を架橋する関係論的記述に社会学的な社会的排除論の今後の展望を見出した点にある。

キーワード：若者下位文化、文化的生活、社会的排除

1) 日本学術振興会特別研究員
東京大学大学院情報学環
カリフォルニア大学バークレー校社会学部

University of California, Berkeley, Department of Sociology
410 Barrows Hall, Berkeley, CA, 94720-1980

Youth Subculture and Social Exclusion

TANAKA Kennosuke¹⁾

Abstract

This article concerns the social world of youth subcultures in contemporary Japan by bringing into the social exclusion theory. By examining “structurally embedded inequalities,” which tend to be disregarded in post-subcultural theory, this study develops a conceptual and practical view of the social contexts in which the everyday lives of youth subcultures are created. In particular, this paper attempts to bridge the cultural perspective of post-subcultural theory and the structural approach of social exclusion theory.

First, this approach treats the socially excluded youth not as a group of the new poor, but as a new ontological agency of social actors produced as a consequence of social stratification. Second, it brings into focus the epistemological turn from socio-political social exclusion to sociological social exclusion. Third, this research shows that the social exclusion as a process is not only forcibly created by structural factors in the global context, but also reproduced through the everyday practices of the local social reality.

The ethnographical data I have been conducting since 2001 demonstrates the life histories of three young males in a group of skateboarders who gathered at the West Gate Park of the Tsuchiura Station. For them, participation in subcultural activities is not only a form of escape but a means of overcoming the stagnation they experience by making use of subcultural capital they have accumulated in their own bodies.

Key word: Youth subculture, Cultural life, Social exclusion

1 若者下位文化論の問題点

若者下位文化論の到達点であるポストサブカルチャーズ論の蓄積¹⁾に対して、R. マクドナルドとT. シルドリック [MacDonald & Shildrick, T. 2006] が、次の二点を指摘している。ポストサブカルチャーズ論は、第一に、経験的なレベルで、社会的に不利な立場にある若者たちの文化的生活やアイデンティティを対象化していない。第二に、理論的なレベルで、現代若者文化において潜在的に重要なファクターである階級やその他の社会的不平等を軽視する傾向にある。それゆえに、ポストサブカルチャーズ論は、“構造的に埋め込まれた不平等 [Bennett, A. 2005:256]” という社会的コンテクストを看過しているというわけである。この指摘は、この国の若者下位文化研究をとりまく学問的動向と、若年雇用問題をかかえる社会的状況を把握する上で、とりわけ、有効な示唆である。

ポストサブカルチャーズ論の研究史的意義は、1970 年中頃からイギリスバーミンガム現代文化研究所を拠点とした初期カルチュラルスタディーズの理論枠組みを見直し、現代下位文化を捉える新たな分析枠組みを呈示したことにあった。そこでは、初期カルチュラルスタディーズの問題点として、主に次の4点が指摘された。①担い手としての女性たちを対象化せず、下位文化を男性支配的な社会現象として抽出したこと [McRobbie, A. 1991]。②労働者階級出身の若者が下位文化集団の成員であるという認識を前提とし、下位文化と労働者階級文化を本質主義的に結びつけていること [吉見, 2000]。③労働者階級の若者の抵抗の範疇にとどまらない、より大衆商品化した消費文化であるメディアや音楽を検討の対象としなかったこと。④“若者”の定義を、16 歳から 21 歳までの限定的な年齢集団として、設定していたこと [Bennett and Karn-Harris, 2004] などである。

これらの課題を踏まえて、ポストサブカルチ

ャーズ論は、90 年代以降のグローバルな社会現象としての現代下位文化の諸相を捉えるべく、“ネオトライブ [Maffesoli, 1996]” や “クラブカルチャー [Redhead, 1997]” という概念を新たに構築していった [Muggleton & Weinziel, 2003]。ポストサブカルチャーズ論の成果として位置づけられるのは、ミュージックカルチャー [Bennett, 2000; Stahl, 2003]、レイブ・クラブカルチャー [Malbon, 1999, 上野, 2005]、奇抜なスタイルに身を包むスタイリッシュな集団文化 [Muggleton, 2005] である。

下位文化自体、一つ概念であると考えるなら、新たな概念の構築それ自体は別段問題ではないし、初期カルチュラルスタディーズを継承しつつ乗り越えていこうというスタンスは、至極、全うなものである。だが、このミュージクシーン、ダンス・クラブ・レイブカルチャー、スタイル文化を現代若者文化として過剰に論じる傾向と、それにより、見落とされる担い手としての若者の文化的生活とアイデンティティへの着目を示唆しているのが、マクドナルドによるポストサブカルチャーズ論への一点目の批判である。

次に、下位文化の担い手である若者をとりまく構造的要因として問題視されている今日の若年雇用の動向を捉えておこう。近年、この国において顕著なのが、長期的な失業、不安定な就業を強いられる若者の急激な増加傾向である。2002 年、15 歳から 19 歳までの若年男子の年齢別完全失業率は、15.2% を記録した。ちなみに、15 歳から 19 歳までの年齢別完全失業率の平均値は、1970～79 年にかけて、4.45%、80 年～89 年は、7.67%、90 年～99 年は、9.45% であることから、2002 年の数値は、きわめて高値であるといえる²⁾。若年失業率が、9.0% を超えるようになった 99 年以降は、若年失業率と完全失業率の差も、4.0% 台の開きになった。通時的にみると、96 年を分岐として、若年失業率と完全失業率との差が拡大していく。このように 15 歳から 24 歳の年齢区分

の若年失業率が、国内全体の完全失業率と比べて、高値であるという具体的顕示を通じて、若年層の社会的境遇は社会問題化した。さらに、若年層の雇用問題は、この国に限ったものではなく、本格的なポスト産業化社会をむかえる先進諸各国に、時間的な差はあるものの、同様にみられるグローバルな社会問題でもある。

そのなかで、社会的に不安定な境遇にある若者たちの多くが、学校、就職、失業、雇用訓練、短期雇用、無業というような長期的なサイクルのなかから、その抜け道を自ら見つけ出せないで、社会的に不利な立場に長期にわたり追いやられる状況が問題視されている。構造的に生み出される社会的不平等、ならびに、社会的不平等が、失業やパートタイムの職場を転々とする特定社会階層の若者に集中することを踏まえたうえで、若者の下位文化的行為の社会的意味を捉えていくべきであるというのが、マクドナルドの二点目の主張である。

マクドナルド自身は、イギリス北東部のティーズサイドにある貧困地区を選定し、その地域に埋め込まれた社会的ネットワークや社会関係資本が、いかに、若者の経済的貧困や階級等の社会的不平等を再生産するかに着目してきた[MacDonald, 2005]³⁾。そこで、マクドナルドは、社会的に不利な立場にある若者の多様な移行経路を確認し、貧困地区の限られた社会関係資本と強固な社会的紐帯が、社会的排除の状況から抜け出す若者たちの可能性を限定づけてしまうという逆説的状況を指摘する。この際に、若者をとりまく不平等の構造的コンテクストを捉えるための分析視角として用いられているのが、社会的排除論である。

2 社会的排除論の課題

社会的排除論の研究史的源流は、70年代中期から80年代初期にかけて、グローバルな労働市場の再編によって生み出された「新たな貧困層」に着目したフランスやイギリスをは

じめとするヨーロッパ諸国の社会状況への政策学的解決を提示した諸研究にある⁴⁾。なかでも、エスニックマイノリティ、難民、黒人、女性、レズビアン、ゲイ、障害者、老人、子供、若年層と多様な社会階層の集団の境遇が社会的排除の対象として取り上げられた[Gough, J & Eisenschitz, A, 2006]。

とくに、本稿の事例に関連する若年層の社会的排除では、失業率の上昇と、失業期間の長期化をもたらす若年労働市場からの排除が大きな要因を占める。ここでは、この国の不安定な雇用状況にある若者を論じる視角として、社会的排除論の課題を整理しておこう。

一点目は、社会的に不安定な境遇にあるとする若者を「新たな貧困層」として捉えるのではなく、「新たな社会層」として対象化することである。この国の若者を対象として想定するとき、「新たな貧困層」としての若者という視点には、疑問符がつく。現実的に、失業中の社会的身分である若年層の多くが、両親と一緒に暮らすことで、身体を健康を維持するのに最低限必要なエネルギーを、容易に摂取しているし、食事や住居以外に社会生活に必要な衣服や医療・教育に関するコストも賄っている。つまり、経済的な貧困という尺度では、この国の若者の社会的境遇を的確に捉えることはできない。この点が出発点であることを忘れてはならない。

そこで、振り返るなら、不平等や格差における若者の社会的境遇をとらえてきたのが、文化的再生産論であった。イギリス階級社会のように顕示的ではないにしろ、この国においても、労働者の父親を持つ子供が、反学校文化や下位文化集団への担い手でありながら、結果的に、労働者の職場へと赴いていく緩やかな再生産構造は、すでに、確認されてきた。本稿の主題と関連して、ここでポイントとなるのが、P. ウィリスが取り上げた70年代のイギリスの労働者階級の若者、佐藤郁哉が追跡した80年代中期のこの国の暴走族の担い手が、どちらも、学校文化に対する反抗的な価値観を集団で共有し

ながらも、学校から職場へと辿りついていることである⁵⁾。もちろん、この社会的に落ち着いていくこと自体が、社会階層移動をともなう文化的再生産の過程そのものであり、その点は、軽視されてはならない。だが、1ついえるのは、少なくとも、この国においては、90年代前半までは、中学や高校を卒業し、労働者として働く高卒若年層（中卒を含む）、大学や専門学校に進学後、専門職や一般職に就く大卒若年層（専門学校卒業者を含む）ともに、就学から就職というスムーズな移行が確保されてきたということである。高卒若年層には、地元の下請け工場等へ正規雇用が十分に確保され、大卒若年層には、卒業後、アルバイトや留学等、「やりたいこと」に取り組んだ後にも、一般職や専門職に、雇用されてきた。そして、就職後に保障された終身完全雇用は、U.ベック [1998] も示唆するように、たんに、就業の長期的保障としてではなく、労働と非労働との明確な境界をもうけ、人々の生活様式を時間的にも、空間的にも固定してきたわけである。

ところが、90年代以降になると、この若年層の雇用状況は、大きな転換期を迎えることになる。ポスト産業化・工業化社会が牽引する労働市場の再編が、金融・情報部門も拡張をもたらすとともに、期限付き契約、更新性契約、変則時間就労、不正規雇用等の労働のフレキシブル化を推し進めてきた⁶⁾。都市部におけるより一層の労働のフレキシブル化は、労働と生活からなる都市的日常の成立根拠そのものを根底から揺るがし、人びとの間に〈不安〉を齎すことになった。若者たちは、これら一連の労働再編の皺寄せをまともに被ることになった。若年で滞留するものの多くが、「フリーター」や「ニート」と形容される不安定な身分に滞留している。こうしたなかで、職住分離、終身雇用、年功序列に代表されるこの国の従来の産業・工業型企業社会がつくりあげた生活様式と異なる生活のスタイルが、若者たちに求められるようになった。つまり、文化的再生産の過程に、若者を職場か

ら遠ざけるという新たな滞留局面が、生み出されたわけである。言い換えるならば、「労働による搾取」ではなく、「労働からの排除」という境遇を強いられることになった。

そこで二点目として、「新たな貧困」が社会的排除を生み出すという政策学的解釈図式から、「新たな貧困」と社会的排除がいかに相互に結びつきあっているのかを解き明かす社会学的関係図式への認識論的転回の必要性を提起したい。先にもみたように、「貧困」は、必ずしも、社会的排除を生み出す絶対条件ではない。現時点では、社会的排除の生起要因は、労働市場排除、経済的排除、制度的排除、社会的孤立、文化的排除、空間的排除の6点に整理されている [Kronauer, 1998]。留意すべきは、ここでの生起要因は、個別に存立する問題群ではなく、“社会プロセスの複合化したコンビネーション [Gough, J. & Eisenschtz, A. 2006; 61]” からなる連関構造をもった関係図式として位置づけておく必要があるということである。岩田 [2005] は、社会的排除論の研究意義について、「解決すべき」ものとして貧困を科学的計測のもとに抽出し、その状態を問題視するだけでなく、貧困をつくりだす社会と貧困層との〈関係〉それ自体を問題視し、統合と排除のプロセスを行為者の絶望・抵抗・抗争を含めて把握しようとする機運をつくりだしているところにあると指摘する⁷⁾。

この点と関連する三点目として、プロセスとしての社会的排除が、単に、グローバルな構造的要因に暴力的に生み出されるものだけでなく、ローカルな文脈のなかで、日々の営みをつうじて、生み出され、再生産される日常的な排除であるということを明示したい。貧困研究などで積極的に取り上げられている社会的排除という視角の特徴は、貧困研究が「結果」を問題視しているのにたいして、「経過・経路（プロセス）」を対象化しているところにある。都市に暮らす貧困層については、これまで、「都市貧困層」に関する豊穡な蓄積がなされてきてい

る。まとめるならば、都市貧困層とは、都市の階層および空間配置を分析の準拠点としたうえで、貧困線または、それ以下の生存水準にある個人または世帯と定義され、絶対的貧困、相対的貧困、主観的貧困の視点をもとに解釈されてきた⁸⁾。重要なのは、労働市場からの排除と労働市場内部での排除を念頭に置いた上で、現代都市社会がかかえる構造的要因と当事者たちの日常的な社会的現実とがいかに絡まりあい社会的排除を生み出していくのか、この経緯を解きほぐしていくことである。この点を踏まえるならば、従来、社会政策的アプローチにおける社会的包摂／社会的統合への対概念として捉えがちであった社会的排除は、今日の若者をとりまく有効な視角となりうる。

この上記三点は、社会政策・社会福祉の観点から提起されてきた社会的排除論を、社会関係を射程に入れた社会学的な社会的排除論として理解していくうえで、重要なポイントである。ポストサブカルチャーズ論の問題点と社会的排除論の現代的特性をふまえると、若者たちの文化的行為に埋め込まれた社会的不平等を生み出す構造的コンテクストに目をむけながら、それでも、若者の文化的行為を軽視しない、つまり、社会的不利な状況が、社会的に排除される若者たちを一方向的に再生産するという単線的解釈でもないアプローチを展開することを、本稿の課題として提起できよう。

次節では、3人の若者の事例をとりあげ、それぞれの学校から職場への移行、その後の離職過程、その間、継続している文化的活動を見ていく。そして、この移行期に、彼らにとって、いかに、文化的行為が重要なものであるか。文化的行為の担い手であることと、不安定な社会的身分の継続が、社会的排除といかなる関係性をもつのかについて、検討していく。

3 不安定な生活と文化的行為

本節の記述は、筆者が、2001年以降継続し

ている茨城県土浦市の駅前広場を利用するスケートボードを媒介に形成された若者下位文化集団のフィールドワークで得たデータをもとにしている。この間、継続的に文化的活動に参加してきたのは、15名ほどのメンバーで、年齢層は、15歳から30歳までである⁹⁾。この集団は、第一に、生まれ育った土浦を地元とするローカルスケーターであることと、第二に、成員の大半が高卒若年層の男子によって構成されている。また、スケートボードの身体活動を中心的な文化的活動としながらも、そのほかにも、ヒップホップ系のクラブイベントに定期的な通うもの、グラフィティに打ち込むもの、イベントのDJとして活動するものもいる。幾つものストリート系下位文化的行為に参加し、下位文化集団間を行き来する柔軟な担い手でもある。

土浦西口広場の開設当時から、広場を利用するメンバーの現在に至るまでの社会的属性の変化と職業移動をみておくと、現段階では、ロンドンへ語学留学に出発した剛史を除いて、地元下請け工場で働く者とパートタイムとして働く者、あるいは、無業中であるもの等に位置づけられる。そのなかで、本稿で取り上げる和憲、佑太、大助に共通するのは、高校を卒業するともに、地元の下請け工場へと一度は、就職するが、その後、職場を早々に辞めていること、職場から離れていく過程で、スケートボードをはじめとする、ストリート系の文化的活動へとよりのめりこんでいく様相である¹⁰⁾。

(1) 失業中の下位文化

和憲は、1985年に大阪で生まれ、土浦で育った。土浦生まれの父と大阪生まれの母、7歳上の姉と5歳上の兄をもつ。幼稚園のときは、姉が絵を書いていたのも影響し、絵を書くことやものをつくるのが得意な子供だった。小学4年生になると、地元のスポーツ少年団でミニバスケットボールをはじめ。ミニバスケットボールは、行くのが面倒になりすぐに辞める。学校の昼休みや休日には我流で後方宙返りや側

転、ハンドスプリングを練習していた。5年生の誕生日のときに兄がしていたスケートボードとは違うインラインスケートを両親からプレゼントしてもらう。しかし、インラインスケートシューズが足から離れないこと、しかも、転倒時に、シューズに固定された足が強く痛むという理由からインラインスケートは続かなかった。6年生になると、遊びでスケートボードを始める。始めてすぐに、オーリーを成功させる。さらに、危ないときに板からすぐにおりられるのでスケボーを続けることができたと言った。

中学校に進学すると、小学校のとき地区の体育館で少し習ったことのあった卓球を部活動として選択する。卓球部には、3年間所属したがほとんど顔をださなかったという。中1のときの誕生日に兄からスケートボードを買ってもらう。中2の夏からは、学校の授業が終わると夕方からずっとスケートボードをしていた。中3の夏から少し家の近くの塾に通い、K高校に入学する。K校の生徒の大半は、高校卒業後、大学に進学することなく就職する。高校卒業後の彼らの就職先には、下請け工場が多い。そして、和憲は、同じくK高校の卒業生である兄貴の剛史から、高校の内容を聞き、卒業後に就職できる高校を「気軽に選択した」のである。

すでにスケボーにのめり込んでいた和憲は、高校の部活には所属しない。K高校では、当時学内にスケボーをもっていくと取り上げられてしまう。他の生徒が学校で部活動に励んでいる時間に、和憲は学校から帰って仲間とともにスケートボードをしていた。進学のために必要な受験勉強や他の生徒が所属し活動する部活動に当てられる時間を含めて、中学校や高校時代に持つことのできる時間の多くを惜しみなくスケートボードに費やしてきた¹¹⁾。

和憲は、高校2年のとき、「将来は、イラストレーターになって絵を書いていく。そのために、高校を卒業したら東京の専門学校にいくつもりだ」と語っていた。だが、実際に、高校を卒業すると、地元のクリーニング屋に就職する。

そして、クリーニング屋をやめて、アルバイトをはじめる。高校を卒業し、就職し、離職した。その間、変わらないのは、スケートボードを続けていることである。スケートボードを続けるために、一時的に働くことはあっても、働き続けるために、スケートボードから離れるということはない。下位文化的活動を続けるために、一時的にはたらくという生き方は、和憲にかぎらず、今日を生きる少なくない若者にもあてはまる。

和憲がクリーニング屋をやめた最大の理由には、毎日、同じように過ぎていくことへの不満感にあった。「朝起きて、きまって、職場に行き、帰宅して、スケボーに行き、また、寝る」(和憲)という反復からなる生活。労働と余暇時間が規則的に繰り返される毎日の生活に身を置いたとき、和憲は、その生活に物足りなさを感じた。和憲は、中学や高校のときも、頻繁に夜間にかけて、スケートボードに取り組んできて、ときに、学校を休んできた。こうした文化的行為が生活の中心となって経過していく時間こそが、馴染み深いのである。定職から離れて、アルバイト生活をおくる若者が、仕事への漠然とした不満を抱くようになるのは、この下位文化的活動をとおして身体に蓄積してきた内的時間と都市が要求する労働時間との不整合からくる。問題なのは、ここでの原因を、当事者たちが自覚して言葉にする機会は少なく、多くの若者は、どこからきているのか理解できない身体的な虚脱感に苛まれているということである。

和憲の場合、この身体的な虚脱感を解放させるのが、スケートボードでの目に見える上達である。和憲は、これまで続けてきたスケートボードで確実に技術レベルを向上させ、関東近郊で主催されるスケートボードの大会で、上級者が参加するAクラスの上位に入賞するまでになっている。また、地元土浦のスケートボードパークで主催するイベントには、中心的なメンバーとしてかわり、キッズのスケートスクールのインストラクターをつとめている。現段階

では、キッズへのスケートボードスクールは、基本的に、地元の有志により無償で開催されるか、パークの使用料を徴収するのみで、行われている。指導報酬を受ける場合でも、わずかな金額である。ここ数年のスケートボードパークの全国的な設置を、スケートボードという文化的活動の制度化の現われとして捉えるならば、上級レベルに達したスケートボーダーには、その経験と技能を活かして、それを伝えていくというインストラクターとしての機会も、増えてくる。スケートボードという下位文化的活動をいかして、社会的なコネクションをつくっていくことは、今後、十分に可能である。和憲のように、失業期間中に、打ち込んでいる下位文化的活動は、下位文化的身体資本¹²⁾の蓄積行為でもある。たしかに、現時点で、下位文化的身体資本を、既存の労働形態へと転化させる機会はずしも、多くはない。だが、和憲の生き様は、雇用創出による職場提供が、長期失業状態にある若者の社会的排除を打開する唯一の答えではけしてないことを教えてくれる。

(2) 下位文化的象徴性の獲得

1980年、土浦生まれの佑太は、小学校のときスポーツ少年団の少年野球で投手をしていた。この当時、佑太が投げるボールのコントロールや球威は評判で、まわりからもかなり期待されていたという。中学に入ると野球部に入部する。そこで、佑太は、野球部の先輩―後輩関係に疑問を抱いた。特にボール拾いや雑用を命じる先輩に対しては「なんでそんなに偉そうなのっていつも思っていた」という。

野球部に入部したものの、不満を抱いていた中学一年の夏休み、佑太は、「ただなんとなくスケボーにひかれ」、スケートボードをはじめると、すぐにのめり込み、「部活に行くぐらいだったらスケボー、部屋にいるくらいならスケボー」になったという。この頃から、嫌気を感じていた野球部をサボるようになる。佑太の母親は、「どうやら中学のときの先輩とう

まくいかなかったみたいで、ほんと小学校の時はいつも野球で今からじゃ考えられない。でも、スケボーするようになって、毎晩スケボーしてから帰ってくるし、高校には一応いったけどスケボーにとりつかれていた。昔からなんか言われてやるよりは自分でしかも一人でやってたんだけど、スケボーはじめてからはそれがひどくなった。どんどん自分を囲むようになった。それで高校を出てからは、一人暮らしを始めて、父親とはここ数年話もしてない」と佑太の変化を語る。

結局、中学の3年間、野球部に所属だけはしていた。その後、佑太は、G高校に進学する。高校では、部活動には所属しなかった。高校卒業後、地元の下請工場に務める。その3ヶ月後に、仕事を辞めた。それからは、アルバイトと職探しを繰り返していく。宅配のアルバイトは、トラックの荷物を運ぶだけで、仕事が少ない。仕事がないときは、仕事場の洗車場で自分の車を洗ったりした。しかし、アルバイト先から突然アルバイトの継続を断られた。その後、ふたたび、正社員をめざして就職活動を行い、半年の契約社員として工場で働き、アルバイト生活を送ってきた。

高校を卒業し、アルバイト生活をおくる現在まで、続けてきたスケートボードでは、佑太は、身体的な器用さから才能をいかんなく、発揮している。ほかのスケーターと比べると、佑太のトリックは、しなやかで、安定感もある。いまでは、地元土浦でもっとも、スケートボードの技術レベルが高く、国内のトップスケーターの一人として認知されるまでにいたる。佑太は、スケートボードのイベントや大会に参加し、結果を残すことで、国内での知名度をあげてきた。今では、佑太の滑りをみるために、都内から土浦の広場に来るものもいるほどだ。スケートボードの専門雑誌やDVD出演、国外への遠征にも、声をかけられるようになった。

そうしたなか、佑太は、スケートボードをするために、都内生活を始めた。生活費は、アル

バイトで賄うことになった。都内に住んでいるときも、たいてい2週間に一度は、土浦に帰ってきて、広場で滑っていた。そして、約一年半の都内生活をおえて、土浦に戻ってきた¹³⁾。

佑太自身も、ただ、なんとなく、はじめたスケートボードにこれほどのめりこみ、国内のトップライダーになるとは思ってもいなかった。最近では、土浦の年下の若手を連れて、週末に、都内のスポットを滑ることも企画し、実行している。いまのところ、スケートボードをとおして、生活費を稼ぐのは不可能であるため、佑太は、スケートボードを続けるために、アルバイトをしている。その半面で、本人は短期の契約社員としてではなく、長期の正規社員として再就職をのぞんでいいる。実際には、スケートボードでの「成功」を評価する受け入れ先は、それほど、多いわけではない。

和憲がローカルレベルでスケートボードの下位文化的象徴性を獲得しているのにたいして、佑太は、全国的なレベルで、その先には、グローバルなレベルでの活動の展開をうかがわせる。現に、すでに、国内レベルでは、佑太は、国内の代表的なスケーターの一人として一目置かれ、雑誌やDVDでも、頻繁に取り上げられている。佑太のケースには、下位文化的活動を、徹底的に極めることで、地元のストリートでのスケートボードでは接することのなかった機会に出会っていく展開が伺える。その先には、下位文化的象徴性をいかして、既存の労働とは異なる種類の新たな労働を生み出していくことも不可能ではない。

(3) 正規雇用、離職、下位文化的労働へ

大助は、1984年に土浦市で生まれ、土浦で育つ。父親と母親が土浦駅近くで和菓子屋を営んでいる。2人の兄を持ち、2人ともクラブミュージックにはまり、1番目の兄貴はイベントでDJをしている。小さな頃から2人の兄の音楽の影響を受けてきたが、小学校3年から始めた野球を高3まで続けてきた。スケートボー

ドは中学1年から始める。中学のときの野球部の仲間と一緒に始めたが、すぐにみんな辞めてしまった。それでも、一人で滑っていたら和志達と仲良くなった。野球部のメンバー以外でスケートボードの仲間は大助にとって貴重な存在だったという。

中学1・2年の頃は、大助が通う学校は荒れていたという。このころ続けていたリトルリーグ野球の実績が評価され、3つの高校からスポーツ特待生の推薦の話がくる。J高校、I高校、G高校である。大助は、家から最も近いG高校を選んだ。この3校のスポーツ推薦の話から大助がG高校を選択した理由について、「どうせ野球は高校3年間と決めてるし、じゃ、家から近いところがいいかなって、高校出たらすぐに就職する。野球はやめるけど、スケートボードはやめない。おもしろいし、ここ(パーク)のみんながいる。もしかしたら、野球は草野球でちょこっとやるかも」と語った。

大助は、G高校の野球部の主将をつとめてきた。G高校では、スケボーを禁止しているわけではないけど、学校では一切スケボーをしない。他のスケートボーダーがスケートボードにのめり込む過程で、部活動や他のスポーツを辞める傾向があるのに対し、大助は中学1年のときから始めたスケートボードとスポーツ推薦の話がくるほどの実力をもつ野球とを両立してきた。

大助は、「高校」生活について、「高校では、かなりいい生徒を演じている。勉強はできないけど、授業はそれなりに聞いているし、聞いているふりもしている。スケボーで坊主にした頭も野球部の主将ということであいつは気合が入っているって評価されるので都合がいい。先生には真面目な生徒だと思わせているが、実はそんなことはない。大抵の生徒が学校で目立とうとするけど、俺はその逆で学校にいないときを大事にしている」と語っていた。

学校生活では、本来の自分の個性を出そうとしない。適当な生徒を演じていれば、学校の時間は過ぎていく。学校は、バック[1998]の

予見をこえて、いまや、ただ、時間を浪費する「待機所」になりかわってしまった。学校という制度に「不透明な徒労感」[立岩, 2001]を抱くのは、大助に限ったことではない。それゆえに、学校以外で過ごす、広場やストリートでスケートボードに取り組んでいる時間や仲間、文化的行為そのものが、以前にもまして、現代の若者たちには、欠かすことのできない貴重な財産となるのである。

高校を卒業すると、大助は、神奈川県にある電化製品の組み立て工場ではたらくことになる。大助は、神奈川で働いていたあいだ、土浦の仲間と会う機会が減る。就職時の契約どおり、同会社の地元土浦の下請工場に大助の希望がかない移ってこれたのは、2年後のことである。土浦に戻ってきてからは、広場でのイベントや、スケート仲間との花見や忘年会等に顔を出している。大助は、スケートボード以上に、クラブでのイベントや、ストリート系イベントにDJとして参与することに関心が向いていった。

それから、一年後、大助は、土浦の工場を辞めた。「自分の好きなことをやりただけやる。」というのが、大助の離職理由である。和菓子屋を経営する両親を、ときどき、手伝うようになった。大助も二人の兄貴をおいかけるようにして、不安定ではあるが、自分の好きなことをできる道を選択した。3人の兄弟の誰が、土浦の老舗の和菓子屋を継ぐことになるのか。いまは、定かではない。

2006年5月から、大助は、土浦の地元のスケートボードショップの店長が、事業拡大を図り、土浦から車で20分ほどのつくば市にオープンさせたストリートファッションやアイテムを扱うアパレルショップの店長として働き始めている。店舗を任されることになった大助のケースは、筆者が土浦や都内のスポットで話を聞いてきた70人ほどのスケートボーダーのなかで初めてのケースである。下位文化的関心を活かした職場としては、ストリートファッションを取り扱うショップや、スケートボードやサー

フィン、スノーボードなどの横乗り系ボードショップの店員として働く機会がある。土浦の集団のなかからも、4人の経験者がいる。この場合、スケートボードの身体技術レベルが選別の基準に用いられるわけではなく、多くのスケートボーダーにも、この門戸は開かれているわけである。下位文化が、新たな市場を開拓し、より大衆化していくことは、それほど、驚くことではない。逆に言えば、われわれの日常に浸透しきった資本主義は、いかなる下位文化ですらも、徹底的に商品化していく。ここには、下位文化と直接的に関連する雇用が生み出されるわけで、こうした場をいかにいかしていくことができるかが、いま、下位文化の担い手たちに問われている。

4 結論：社会的排除の間隙

本稿で取り上げてきた3人にまず、共通しているのは、彼らが学校文化の対抗的で反抗的な担い手となるわけでもなく、地元の下請け工場に従順に組み込まれていくことも拒んできたことである¹⁴⁾。そのことにより、労働市場の再編によって作り出された不安定な労働市場に片足を踏み込みながら、社会的に不安定な境遇に滞留することになった。

より詳しくみていくと、和憲、佑太、大助は、それぞれに、社会的な不利な状況を2年から5年にかけて経験しながら、その間に下位文化的身体資本を蓄積し、この境遇を抜け出すきっかけを掴みつつある。和憲は、スケートボードという下位文化的身体資本をもとに、年下のキッズ世代に、スケートボードの技術を伝達していくインストラクターの役割を担う機会を得ている。佑太は、すでに、下位文化的象徴性を獲得し、スケートボードの専門メディア媒体に幾度も取り上げられながら、グローバルに活動を広げている。大助は、ストリート系ショップの店長として働きながら、下位文化と労働の現場が結びついた場で経験を積んでいる。社会的に不

安定な生活境遇にあるとされる若者たちは、ただただ、その状況に打ち負かされているわけでもなく、文化的生活に没入することで現実からの逃避を図っているわけでもない¹⁵⁾。担い手たちは、それまで獲得してきた社会的ネットワークや社会関係資本をいかしながら、自ら打開策を見つけ出そうとしている。

ここで改めて指摘できるのは、若者をとりまくこの国の社会的排除とは、マクドナルドが参照とする社会的排除論で呈示されているほど、現段階では、強固なものではないということだ。この点をより明確にするために、マクドナルドの問題点も指摘しておこう。マクドナルドの問題点の一つ目は、貧困地区をあらかじめ対象化し、その地区を社会的に排除される地域[MacDonald, R. and Marsh, J. 2005]と設定し、貧困と社会的排除を空間的ファクターとして本質化して結び付けている点にある。この前提から導きだされるのは、貧困地区での社会的不平等の単線的な再生産プロセスである。二つ目の問題点として、社会的に排除される状況を裏付ける当事者の語りの効果的抽出に収斂し、若者の下位文化的行為それ自体を等閑にする傾向がある¹⁶⁾。若者たちが、定職に就けないばかりか、その不安定な状況が長続きすること、貧しい社会的ネットワーク、ドラッグ依存やドラッグマーケットについては明らかにされるが、これらの語りからは、マクドナルドが重要視していた若者たちの文化的生活は、抽出されない。

それゆえに、本稿の事例とマクドナルドの問題点を踏まえると次の点が導きだせる。第一に、この国の社会的排除は、社会的に排除された地域というように空間的範囲を出発点して想定することはできない。第二に、社会的に不利な立場にあるものが、必ずしも、経済的な貧困状態にあるわけではない。第三に、文化的活動の担い手は、労働者階級の出身というように特定階層を想定できるものではないことである。つまり、社会的排除とは、若者の文化的行為を中軸とした日常生活に埋め込まれている、いわば、

間隙を幾重にもかかえる脆い構造として存立し始めているにすぎないのである。

若年層の境遇を問題視する社会的排除論は、雇用創出にその解決をもとめる政策学的提言へと容易に結びつく。主張は、きまって、明確である。まずは、若者の雇用を確保することだと。だが、下位文化的行為からなる日常を生きる若者たちにとって、制度的な職場提供は、労働の現場への社会的包摂にほかならない。けれども、この社会的包摂を、社会的排除からの打開案として掲げるとき、ふたたび、職場を離れる若者は、より深刻な排除の対象へと追いやられる。欧米型の社会政策提言の下請けは、この国の若者の文化的生活との齟齬を広げるばかりではなく、あらたな社会的排除を生み出すことにもなりかねない。さらにいえば、こうした社会政策学的社会的排除論は、社会的排除の構造をより強固なものへと仕立て上げていく。筆者は、多様化した人びとの生活様式への過剰な政策学的制度介入が、文化的生活のなかで模索を続け滞留している者にとっての象徴的暴力として猛威をふるう事態の発生を危惧している。

こうした事態にそなえるべく、本稿で試みた若者下位文化と社会的排除の関係性に着目し、若者の文化的生活のなかから立ち上がる胎動に着眼する社会学的な社会的排除という視角には、従来の雇用確保による社会的包摂ではない方法で、社会的排除の状況を内側から打開していく幾つかの糸口が確認された。社会的排除を強固で静態化した構造へと本質化しないこと、また、若者の下位文化的生活そのものを軽視しないこと。その地平で、若者たち自身の選択と政策的包摂がせめぎあう日常の関係を大文字と小文字の権力に配慮しながら慎重に解き明かしていく。若者下位文化と社会的排除をとりまく問題群を読み解く鍵は、ここにある。

註

- 1) ポストサブカルチャーズ論は、そもそも“体

系化した知識のまとまり“として理解すべきではない [Muggleton, 2005:214] と指摘されているが、ここでは、本稿の立場を明確にするべくマクドナルド [MacDonald, R, 2006:127] の指摘を参照している。

- 2) 15 歳から 24 歳若年男子は、2003 年には、総務省の労働力調査の年齢別完全失業率で 11.6% にまで達している。その後、2004 年には、10.9%、2005 年には、9.9% と若干の改善傾向にあるが、他の年齢区分と比較や、国内完全失業率が 5% 前後であることからすると、依然として、失業率の値が高い。総務省統計局ホームページ (<http://www.stat.go.jp/>) にアクセスし、労働力調査、長期時系列データ、5 歳年齢別、完全失業者数および、完全失業率を確認した。
- 3) ちなみに、マクドナルドの一連の研究は、イギリス北東に位置するティーズサイドの“East Kelby”地区の 15 歳から 25 歳までの 88 人（内訳、女子、45 人、男子 43 人）の若者を対象にしたインタビュー調査をもとに検討が加えられている。
- 4) 「新たな貧困層」として可視化されたのは、従来の社会保障制度で対応できない長期失業中の若者、シングルペアレント、下層労働に組み込まれる移民等である。岩田 [2005] が参考になる。
- 5) 興味深いことに、ウィリスは、「若年層の長期的・構造的な失業は、街頭における手もちぶさたな若年層の交流を生み出しながら、対抗文化の台頭を加速させ、さらに、攻撃的な文化を生み出すことになる」[P. ウィリス, 1977 = 1985, 283 (引用、一部、筆者による修正)] と述べている。つまり、若年失業者についても、ウィリスは、「失業が対抗的なエネルギーを生み出す」という対抗文化論的視座を保持していることになる。この点は、この国の 90 年代後半の若年失業者の実情とは、随分と温度差があり、検討の余地を残している。また、佐藤において

は、とくに、記述されるにいたらなかったが、すでに、玉野 [2004] も指摘しているように、暴走行為に明け暮れた若者たちを、受け入れていく京都の地元産業構造があったことは想定に難くない。

- 6) 70 年代以降の若年労働市場の構造的変化の解釈は、三谷 [2001] を参照。
- 7) 岩田は、冒頭章で、P. ウィリスの著作を引用しながら、若年層と社会的排除の関連を指摘しているが、示唆にとどまる。冒頭章以降での実証的記述がなされる各章において、若年層の社会的現実とは未検討である。この国の若年層の対象化とは、貧困や社会的排除の対象として実証的検討がなされたものは、現段階では、提出されていない。労働経済学者らの不安定労働者としての「フリーター」「ニート」研究においては、若年層の経済的生活に焦点をあて、彼ら・彼女らの文化的生活には迫っていないのが現状である。拙稿 [2004a] は、若年労働と下位文化の関係性について論じている。
- 8) 都市貧困層の研究意義、概念的整理は、青木 [2000] に倣った。
- 9) 成員のパーソナルデータに関しては、拙稿 [2004b] に詳しい。
- 10) ちなみに、マクドナルドが無作為に抽出した個人の聞き取りを分析素材としているのにたいして、本稿では下位文化を媒介に形成された集団をもとにしている。また、本稿の事例検討においても、ポストサブカルチャーズ論が提起した初期カルチュラルスタディーズの問題点を念頭に置いている。今回、取り上げているのは若年男子に限るが、女性スケートボーダーに関する分析も、筆者は取り組んでいる [2007b]。
- 11) 高校に比べて中学校は部活動や授業、学校行事に生徒は真面目に取り組むべきだという風潮が強い。一部の生徒を除く多くの生徒たちは、あまりに自明な学校規範に疑問を持つこともなく、規範に従う。スケート

ボーダーの実践は、学校の規範に基づいた評価基準からはいまのところ評価されていない。学校文化は、学校規範に順応しない実践として、スケートボードの文化的行為を位置づけているわけである。彼らがスケートボードにはまっていく過程が、学校の価値基準からはずれていくことになり、それが学校生活との距離を広げることにもなる。もちろん、近年のスケートボードカルチャーの隆盛からして、スケートボードが学校での専門科目に取り上げられる日もそう遠くはない。下位文化の制度化をめぐる問題である。

- 12) 本稿で、下位文化的身体資本 (subcultural bodily capital) とは、下位文化的活動をとおして蓄積される技能や感性、振る舞いからなる文化資本 [ブルデュー, 1990] の一特殊形式であると捉えている。S. ソーントン [Thornton, 1997] の下位文化的資本 (subcultural capital) が、メディアとの関係性を強調しているのに対して、ここで下位文化的身体資本とは、下位文化的活動の身体的行為の蓄積を重視している。下位文化的身体資本に関する理論的整理については、別の機会に詳細な検討を用意したい。
- 13) スケートボーダーの都内への移住、都内の生活、地元への帰郷に関する選択や論理については、拙稿 [2007a] で取り上げている。
- 14) P. ウィリスによって明らかにされた、労働者階級出身の若者が、労働階級の職場を選びとっていく／組み込まれていく文化的再生産の構造は、70年代のバーミンガム北方の工業都市 (調査当時、人口6万人) に基づく事例である。本稿は、90年代後半の郊外都市 (人口13.5万人) の土浦市の若者を対象としている。こうした視点で、若者下位文化研究は、地域産業構造の比較分析とも接点を持っている。
- 15) 今から4年前、「まあ、将来は、なんとかありますよ」と和志は、勢いよく言葉を発した。それから、4年が経過し、筆者と昼食を一緒にしていると、和志は、「最近では、なるべく先のことを考えないように過ごしている」(2005.12.3) と語った。和志は、これまで、7年間、地元の下請け工場で働き続けてきた「安定労働者」でもある。一方で、本稿で取り上げたのは、社会的には、和志より不安定な境遇にあるとされる和憲、佑太、大助であった。和志は、安定でありながらも、この先の不安から逃れられないでいる。和憲、佑太、大助は、不安定な境遇のなかで、下位文化的生活を展開しつつある。正規雇用と非正規雇用、安定労働と不安定労働の内実について、若者の毎日の生活にそくして再考される必要がある。
- 16) これらの点は、今後、ポストサブカルチャーズ論者から R. マクドナルドをはじめとする社会的排除論者に寄せられる反批判の中心的ポイントとなるに違いない。筆者は、ポストサブカルチャーズ論と社会的排除論を相互に関連させていくことが社会的な現状分析には欠かせないと考えている。

文献

- 青木秀男, 2000, 『現代日本の都市下層—寄せ場と野宿者と外国人労働者』, 明石書店。
- Beck, Ulrich, 1986, "Riskogesellschaft: Auf dem Weg eine andere Moderne", Suhrkamp Verlag. (東廉・伊藤美登里訳, 1998, 『危険社会—新しい近代への道』, 法政大学出版局。)
- Bennett, A., 1999, 'Subcultures or Neo-Tribes: Rethinking the Relationship between Youth, Style and Musical taste', *Sociology*, 33(3), 599-617.
- Bennett, A., 2000, *Popular Music and Youth Culture: Music Identity and Place*, Macmillan, Basingstoke.
- Bennett, A. & Kahn-Harris, K., 2004, *After Subculture*, Palgrave, London.

- Bennett, A., 2005, "In Defence of Neo-tribes: A Response to Blackman and Hesmondhalgh", *Journal of Youth Studies*, 9255-259.
- Blackman, S. J., 1997, 'Destructing a Giro': A Critical and Ethnographic Study of the Youth "Underclass", in *Youth, the Underclass and Social Exclusion*, ed. R. MacDonald, Routledge, London.
- Blackman, S., 2005, 'Youth Subcultural Theory: A Critical Engagement with the Concept, its Origins and Politics, from the Chicago School to Post modernism', *Journal of Youth Studies*, 8(1), 1-20.
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions du Minuit. (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタンクシオン [社会的判断力批判] I・II』藤原書店.)
- Gayle, V., 1998 'Structural and Cultural Approaches to Youth: Structuration Theory and Bridging the gap', *Youth and Policy*, 61, 59-72.
- Gough, J. & Eisenschitz, & McCulloch, A., 2006, *Spaces of Social Exclusion*, Routledge.
- 岩田正美, 2005, 「貧困・社会的排除と福祉社会」, 岩田正美・西澤晃彦編『貧困と社会的排除—福祉社会を蝕むもの』, ミネルヴァ書房, 1-12.
- Jackson, P., 2004, *Inside Clubbing*, Berg, Oxford.
- Kronauer, M., 1998, "Social Exclusion" and "Underclass" —New Concepts for the Analysis of Poverty. In H.-J. Andre (Ed.), *Empirical Poverty Research in a Comparative Perspective* (pp. 51-75).
- MacDonald, R., 1997, *Youth, the 'Underclass' and Social Exclusion*, Routledge, London.
- MacDonald, R. & Marsh, J., 2005 "Disconnected Youth? Growing up in Britain's Poor Neighbourhoods", Palgrave, London.
- MacDonald, R. & Shildrick, T., 2006, "In Defence of Subculture: Young People, Leisure and Social Divisions" *Journal of Youth Studies*, 9(2), 125-140.
- Maffesoli, M., 1996, *The Time of the Tribes: The Decline of Individualism in Mass Society*, London, Sage.
- Malbon, B., 1999, *Clubbing: Dancing, Ecstasy and Vitality*, London: Routledge.
- McRobbie, A., 1991, "Feminism and Youth Culture", Routledge.
- 三谷直紀, 2001, 「若年労働市場の構造変化と雇用政策」, 『日本労働研究雑誌』, 490: 19-32.
- Muggleton, D. & Weinzier, R. (eds) 2003, *Post-subculturalist Reader*, Berg, London.
- Muggleton, D., 2005, 'From classlessness to clubculture: a genealogy of post-war British youth cultural analysis', *Young*, 13(2) 205-219.
- Redhead, S., 1997, *From Subcultures to Clubcultures: An Introduction to Popular Cultural Studies*, Oxford, Blackwell.
- 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー—モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社.
- 玉野和志, 2004, 「魅力あるモノグラフを書くために」, 好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社, pp.62-96.
- 田中研之輔, 2004a, 「若年労働と下位文化—スケートボードをする若者の日常—」, 伊藤守編『文化の実践、文化の研究—増殖するカルチュラル・スタディーズ』, せりか書房, 58-67.
- 田中研之輔, 2004b, 「「若者広場」設置活動にみる都市下位文化の新たな動向—「土浦駅西口広場」設置を求める若年層の諸実践から—」, 『年報社会学論集』, 17号: 120-131.
- 田中研之輔, 2007a, 「若年滞留層の社会的排除」, 『地域社会学会年報』, 19号 [印刷中].
- 田中研之輔, 2007b, 『路地裏の身体文化—スケートボーダーの都市生活誌』, 新曜社 [編集].
- 立岩真也, 2001, 「停滞する資本主義のために—の準備」, 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知5 文化の市場: 交通する』, 東京大学出版会, 99-124.
- Thornton, S., 1997 "The Social Logic of Subcultural

Capital" in *The Subcultures Reader*, ed. Gelder & Thornton, S, Routledge, London.

上野俊哉, 2005, 『アーバン・トライバル・スタディーズ—パーティ、クラブ文化の社会学』, 月曜社.

Williamson, H., 1997, 'Status Zero Youth and the "Underclass": Some Considerations', in *Youth, the 'Underclass' and Social Exclusion*, ed. R. MacDonald, Routledge, London

Willis. P., 1977, *Learning to Labor: How Working Class kids get Working Class Jobs*, Columbia University Press. (= 1985, 熊沢誠, 山田潤 訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.

吉見俊哉, 2000, 『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.

* 本稿は、文部科学省科学研究費特別研究員奨励金「現代都市再開発期における公的空間の公共性と文化的実践による空間形成の都市間比較」(2004年－2006年)、ならびに、「現代都市再開発期の空間的隔離と社会的排除に関する研究—都市生活と諸制度の関係性—」(2006年－2009年)による研究成果の一部である。